

診療放射線技師教育について

大島 統男

放射線学校の校長という職種に3年前からつくことになった。臨床の仕事と二本立てである。校長という職種は思いもかけていなかった職種である。だいたい放射線科医になったこと自体思わぬことであった。翻って見て、自分が教育者になること自体若い頃は考えても見なかったことである。小学、中学、高校と教室で授業を聞くことは嫌というほど味わってきたが、今考えてみて、多くの授業は面白くなく退屈のことが多く眠くてたまらなかつたこともあった。授業と関係のないことを考えていることもあった。その原因は教師に問題があったのか、自分自身の姿勢が悪かったのか、今となってはよく分からないが、恐らく両者に問題があったのであろう。確かに受験勉強は決して楽しくなく、また苦手だったし、最後の最後にならないとエンジンがかからなかつたように思う。しかしここで受験の問題を論じる気はないし、その場でもない。いずれにしろ医師になり、いろいろの偶然が重なり或いは出会いがあり運命の糸に引き寄せられるようにして放射線科医にもなった。そして今度は放射線技師教育に携わることになった。感無量というほかない。しかしなつた以上は安穩としていられなかつた。なつた翌日から次から次へといわゆる決済があり、決断をしていかなくてはならなかつた。しかもその決断には終始一貫性がなくてはならない。くるくる意見が変わるようだ信頼がなくなる。当然のことである。少なくとも学生にとって教職員にとって校長は校長である。その目でみている。300余名の学生と17名の教職員と50名の非常勤講師の先生方にも指導的立場に立たなくてはならない。このようにして瞬く間に3年が経ってしまった。この間、何をして、何を与え、何を学んだであろうか。逆説的な言い方だが、教育する上で先ず大事なのは教職員を教育することだと思ふようになった。先ず、一人一人の教員が常識人でなくてはならないと思ふ。その観点からあらためて教員を見てみると、博学な知識をもっているが学生には理解されていなかったり、敬遠されたりする教師もいる。やはり、教員自身に常識的な考え方が欠けていたり、人間味がなかつたりすると学生には信頼されなかつ、信用されなかつた。但し、勿論あくまで学生と教員との間には自ずと境界があるので、ただ学生のご機嫌をとればよいというものではない。それを忘れると学生のペースになってしまう。しかし学生の勉強が出来ないのは、或いはしないのは彼らのせいだ、我々はきちんと教えているのだ、出来ないのは放っておけばよい、と片づけてしまうのは早計の様な気がする。私どもの学校の学生のレベルは必ずしも高いとはいえないかもしれないが、多くの学生

は素直で明るく可愛い。そして礼儀正しい。教育の仕方次第、指導の仕方次第では彼らはそれなりの学力を身に付けなんとか国試に合格できるようなレベルにも達する。この事からいわゆる教育というのは大事なことで簡単ではないと考えさせられる。ところで、多くの放射線科医は放射線技師が何を勉強してきたか或いは日常何を考え何に興味を持っているかは知らないし或いは頓着しない事が多い。勿論技師と良好な関係を保っている施設もあるが、多くの場合、臨床の現場では、技師はただ仕事をしてくれればよいのだ、と考えがちだ。しかし、実際にはよくできる技師、或いは仕事を的確にやってくれる技師とそうでない技師がいて、当然よくできる技師は医師等の評判もよい。が、そうでない技師は放っておかれるか、悩みの種になる。そこで思う。何事も教育、指導が大事だ。すでに出来上がってからは遅い。鉄は熱いうちに打て、だ。日頃指導もしないで彼らを放っておき、出来のよい技師だけ欲しいと考えるのは虫がよすぎる。医師にも卒後教育があるように技師も若いうちから教育、指導することが大事だ。その際、医師自身が医学的知識は勿論のこと、指導者たる人格、常識を備えているかどうか省みる必要がある。日頃仕事をする上で放射線科医の立場から医学的にどんな情報が知りたいか、どんな目的で検査をするのか等折に触れ、彼らに知ってもらふ必要がある。今回、全国診療放射線技師教育施設協議会の長年の課題であった診療放射線技師教育の大綱化がなされた。新しいカリキュラム、新しい技師国家試験ガイドラインは都立保健科学大学の松本教授を中心に作成している。そこでは、今までの技師教育の反省からもっと医学に関する知識或いは病気に関する知識を身につけるよう提案されている。病院における他のコ・メディカルの職種に比べると放射線技師は病気について知らなすぎる、と反省する声が多い。自分も今度このような職種につきこの間の事情につき少しは分つたように思う。臨床の現場において技師との関係あまりよくない場合は放射線科医が手を抜き彼らをあまり理解したり指導、教育する努力に欠けていることが多い様な気がする。そして彼らが若いうちから放射線科医が例えばどんな目的で検査をするのか、その場合に技師に何を望むのか、などを伝えること、場合により議論を重ねていくこと... これらは一見手間がかかり面倒なことであるが日常の業務をスムーズに進める上でも結局は避けて通れない道であるように思われる。

(帝京大学附属放射線学校校長)